



卷頭言

「『ヒト』の足りない教育現場で」

耶麻地区小学校長会副会長

喜多方市立第二小学校長 穴澤 正志

いじめ、不登校、クレームなど、様々な問題が波のように押し寄せる教育現場。児童や教職員をいかに守り、育てていくか一校長に就任した時から、私はこの課題を背負ってきた。

今、様々な意味で教育現場の限界が目前に迫っていると感じる。不十分な教職員数の中で、「協力してくださる方が欲しい」という、藁にもすがる思いがあった。

そんな折、喜多方市立第一中学校の横山校長先生より、民生児童委員による学校訪問の実践についてご指導をいただき、見通しの立たない未来に一筋の光が差した。

現在実施している、月2回の児童と民生児童委員（以下「委員」）との「ふれあいの会」には、次の3つの効果があると考えている。

1つ目は、折り紙や風船遊びなどの活動を通じて、児童が委員との関係性を築き、安心感や信頼感を育み、情緒の安定に寄与すること。

2つ目は、異なる世代である委員との優しさあふれる関わりにより、思いやりや礼儀、感謝の心を身につける貴重な学びの機会となること。

3つ目は、委員をはじめとする地域の方々が見守ってくれているという実感が、児童の自己肯定感を高め、安心して学び、自信をもって生活する力につながること。

こうした交流は、児童が人とのつながりの中で成長していくための大切な土台になるとを考えている。

今後も、委員のお力を借りし、「ヒト」が足りない教育現場の弱点を少しでも補いながら、児童の健やかな育成を目指していきたい。

令和7年度 第2号

[通卷 141号]

耶麻地区小学校長会

令和7年12月1日

～転出校長より～

「新任校長として」

前喜多方市立姥堂小学校長

福島市教育委員会学校教育課指導係長

後藤 洋一

学習指導要領解説総則編のはじまりに、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎える」とあります。既に予測困難な厳しい挑戦の時代に入っていると常々考えていました。しかも、「子供たち」とありますが、「教職員」はもちろん「大人」たちがどのようにチャレンジし、乗り越えていくかが問われていると感じる、新任校長としての2年間でした。

持続可能な社会の作り手として、教育目標である「花と緑を愛し、心豊かで、たくましい子どもの育成」を実現するために、毎日がチャレンジであり、学校を含め地域全体で、困難を乗り越えていく術を示していくことが校長としての責任であると感じていました。

「校長がかわれば学校がかわる」「校長の後ろには誰もいない」「校長は孤独に耐えなければならない」と言われるが、的確な判断を瞬時に下さなければならない校長職にあって、実際は迷い、戸惑うことばかりでした。

そんな中、耶麻地区校長会は、それぞれの学校で、校長先生方のリーダーシップの下、子どもたちの健康と安全を第一にしながらも、教育の質を確保するために工夫し、知恵を絞り、人的・物的資源をフル活用して教育活動を進めている後ろ姿があり、とても心強く感じ胸が熱くなる思いでした。

温かく、校長同士のネットワークを大切にし、耶麻がひとつになって力を合わせる雰囲気がひしひしと伝わり、いつも甘えてしまう自分にとっては感謝しかありません。本当にお世話になりました。

～転出校長より～

「心の故郷 耶麻地区…」

前北塩原村立さくら小学校長

福島市立南向台小学校長 富田 貴俊

私の管理職としてのスタートは、前任のさくら小学校と同じ北塩原村立の裏磐梯小学校で、3年間勤務しました。その間、現在も耶麻地区や会津地区でご活躍の校長先生方と一緒にさせていただきました。会津地区で初めての勤務、しかも管理職として初めて校務に携わることとなり戸惑うことも多い中で、常に親切に相談に乗っていただきました。喜多方のラーメン店に一緒にすることもあり、よい思い出もたくさんできました。

そして、校長昇任後の初めての勤務も同じ北塩原村のさくら小学校。今度はお互い校長の立場で再会することができた先生方もいらっしゃって、勝手にではありますがたいへん心強く思っておりました。二度目の耶麻地区で、偶然にも以前福島市内の学校で一緒に勤務したI校長先生と地区校長会で再会することもできました。

教頭として3年、校長として2年勤務させていただいた耶麻地区の校長先生方には、本当にたくさんのことと教わり、支えていただき心から感謝申し上げます。

現在勤務している南向台小学校は、現在の児童数119名で、各学年1クラスと特別支援学級1クラス、計7学級の小規模校です。市内東部の高台にあり、校長室からの眺めもよいので、ほっと一息つくこともできる恵まれた環境です。地域の方や保護者も子どもたちを見守ってくださるので、学校としては幸い落ち着いています。

県小学校長会生徒指導副部長や県PTA連合会事務局庶務部長も拝命したので、耶麻地区の先生方にもお世話になることが多いと思います。勤務地は離れましたが、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



～新会員の声～

「地域の力を最大限に」

喜多方市立上三宮小学校長 大西 健夫

「チャレンジ、笑顔いっぱいの上三宮」

今年の本校のスローガンです。

全校児童22名と教職員がこのスローガンのもと、令和7年度の教育活動に取り組んでいます。

また、本校は耶麻地区で唯一の「小規模特認校」であり、22名のうち18名が学区外から通学しています。

この状況を踏まえて、教育目標を達成するためにどうしたらよいか、着任後に大いに悩みました。

しかし、その悩みはすぐに解消されました。私が目指す学校経営の土台は、すでに整備されていました。本校ではすでに学校運営協議会が設置され、喜多方市で取り組んでいる農業科の支援員が市内で最大の19名、見守り隊の隊員も数多くいます。

また、公民館との連携も構築されており、本校のクラブ活動は公民館の施設を利用し、地域の皆さんとの交流をしながら行っています。

この土台をさらに発展させていくことが現在の目標です。今後は学校運営協議会のメンバーと熟議を積み重ね、持続可能で楽しい上三宮小学校を作り上げていきたいと考えています。

今年度の新しい取組として、農業科で栽培した米を販売しました。学校運営協議会や保護者が中心となり、用意した米44袋は完売しました。大人も子ども楽しい！と感じられた取組でした。

今後も様々なことに楽しくチャレンジして、大人も子ども笑顔いっぱいになるようにがんばります！



～新会員の声～

「新任校長として」

喜多方市立高郷小学校長 塩生 敬久

4月に高郷小学校に赴任して、7ヶ月が過ぎました。3月に異動先が決まった時には、学校に戻れるうれしさの反面、校長職の重責と初めての耶麻地区勤務への不安がありました。

高郷小学校は、現在53名の在籍です。素直で明るい子どもたちが多く、教育目標の「夢きらり、明日に輝く 高郷の子」のもと、学習・運動に一生懸命取り組んでいます。特に運動が好きな子が多く、休み時間に元気に遊ぶ様子が見られます。学習や学校生活の中で、子どもたちの楽しそうな顔、うれしそうな顔が見られたときには、学校に勤務しているうれしさを感じます。また、保護者・地域の方が学校に非常に協力的で、校庭の雑草がひどく苦慮しているときには、PTA会長さんから「有志で作業をやらせてほしい。」と連絡があり、多くの保護者が校庭整備に協力してくださいました。

ただし、今でも最終判断をする責任の重さを日々感じ、迷うことがあるのは事実です。そんな中、耶麻地区校長会の先生方に温かく声をかけていただきたり、迷った際に連絡をして助言を頂いたりすることが多くありました。「耶麻は一つ」という言葉の意味を実感し、新任校長としての安心感が少しずつではありますが、持てたような気がします。今後も校長会での「横のつながり」を大切にしながら務めて参りますので、ご指導・ご助言をよろしくお願いします。

最後に、私は赴任した場所を知り、楽しむことを心がけてきました。耶麻地区の様々な場所を訪れ、地域の魅力を感じ、「地域のよさ」を子どもたちに伝えたいと思っています。



生活科でのサツマイモほり

学校経営あれこれ

「地域連携」

喜多方市立松山小学校長 斎藤 学

松山小学校は地域とのつながりが強い学校だと聞いていましたが、赴任してみるとそれを実感しました。

まず、公民館との連携です。地域学校協働活動の中心が公民館であり、公民館長はじめ公民館スタッフが学校の要請に応じて、農業科支援員の選定や実際の作業人員の手配をしてくれます。農業科支援員やその他のボランティアスタッフを地域に根差す公民館がハブ機関となって機能しているのは、地域ネットワークの効率化という点でも有効なシステムだと感じます。

そのような体制のもと、本校の独自の教育活動である農業科の「和紙」づくりでは、楮の栽培・間引き・刈り取りから、和紙漉きに至るまで、農業科支援員の協力を得ながら行います。その作業工程の中で、昔から使用されている「押し切り」という裁断機のいわれや使い方など学んだり、支援員さんの子どもの頃の話を聞いたりすることで、子どもたちの経験値や昔の暮らしに関する視野も広がり、とても有意義な活動となっています。

また、国際理解に関する事項も公民館と連携しています。授業参観の際に、国際理解に関するJICAの公民館資料を展示し、児童・保護者を見ていただきました。また、今後、本年度中に公民館が招聘した外国人講師の講話を聞く予定もあり、とても充実した活動を展開しています。

本校は、学校のすぐ隣に公民館があり、連携するには恵まれた環境です。今後も学校と地域が連携し、子どもたちにとっても充実した学習活動になるよう、また、地域にも活気が出るよう、今までの伝統を大切にしていきたいと思います。



話の小窓

「昇降口の涙とホームページの安堵」

喜多方市立駒形小学校長 佐藤 孝宏

春。真新しいランドセルを背負った子どもたちが入学してくる光景は、いつ見ても新鮮な喜びに満ちている。中でも、校門前で繰り広げられる親子の「分離」のドラマは、私の心に深く刻まれる。

入学直後の朝、母親の腕を掴み、泣きじゃくる小さな姿。親子の絆が試される切ない瞬間だ。しかし、子どもたちは昇降口をくぐると、友達や活動によって魔法のように涙を消し去り、何事もなかったかのように一日を過ごし、帰路につく。この学校という場が持つ「力」を痛感する瞬間だ。

ある朝、街頭指導をしていると、まさにあの日の涙を知るお母さんから、思いがけない感謝の言葉をいただいた。「校長先生、ありがとうございます。HPで子どもが楽しそうにしているのを見て、本当ほっとしました」。実のところ、私もある日の涙を知っているからこそ、学校での様子を伝えたい一心で、学級の活動を積極的にHPにアップしようと努めていた。

この経験から、学校HPは単なる広報ツールではなく、子ども・保護者・地域との信頼を築く「心の架け橋」であり、学校の魅力度アップを担う重要なツールだと強く考えるようになった。活動や教育方針を共有することで、家庭と地域の理解と信頼を深め、教育活動全体の活性化につながるのだ。

私は常日頃、「手ぶらで歩けば悪いところを見つけ、デジカメを持ってばよいところを見つけ」という信念で校内を巡回している。これは、頑張る子どもたちの姿を積極的に発信することで、さらなる努力を引き出し、保護者や地域にその「よいところ」を知らせるための、私自身の決意表明となっている。

あの朝の母親の安堵の笑顔は、学校HPが持つ情報共有と安心提供という、かけがえのない力の証だった。これからも、学校と家庭、地域をつなぐ温かいツールとして、その役割を大切にしていきたいと心に誓っている。



<編集後記>

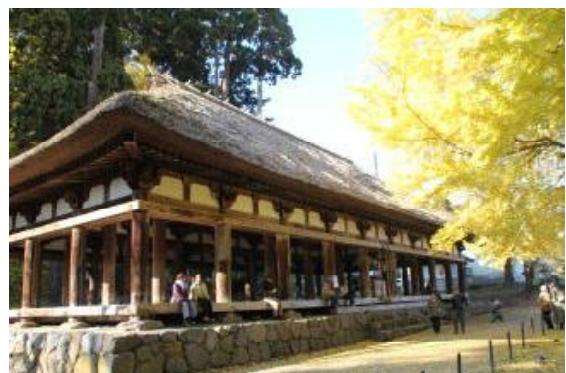
学校行事や出張が続くお忙しい中、原稿をお寄せくださった校長先生方、ありがとうございました。ご協力のおかげで、「会報耶麻」第141号を発行することができました。

今年度、2号目の会報となります。複数の校長先生の原稿に「耶麻は一つ」というキーワードが書かれており、耶麻地区校長会の温かみのある連携のよさを感じました。

先日、新宮熊野神社を初めて訪れました。今年度、クマの影響でライトアップは中止となっていましたが、イチョウと長床は素晴らしい景色で、今まで受け継いできた先人達、現在、維持にご尽力されている地元の方々に感謝の気持ちでした。

師走を迎えて、本格的に冬を感じる季節となりました。昨年は会津地方は大雪で、日常生活や学校運営に支障があったのではないかと思います。今年度は、学校や日常生活に支障がない、季節を感じるぐらいの雪になることを祈っています。

令和7年度 耶麻地区小学校長会 広報部長
喜多方市立高郷小学校長 塩生敬久



11月の新宮熊野神社